
読書記録

中ノ晁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読書記録

【コード】

N5890Y

【作者名】

中ノ晁

【あらすじ】

単なる本のあらすじと感想です。

いづらか読書の参考になれば幸いです。

若きウエルテルの悩み 作・ゲーテ

『若きウエルテルの悩み』

ゲーテ 作

竹山道雄 訳

読書記録を残そうと思う。その本を読んで、その時に感じたことを留めておきたいからだ。まず手始めに最近読んだ本について書いてみることにする。

『若きウエルテルの悩み』

そのタイトルの通り、これは青年期に訪れる苦悩を描いた「私小説」の部類にあたる物語である。ゲーテはこれを25歳のときに完成させ出版、当時のドイツの文壇に一石を投じた。賛否両論あったものの、当時の若者たちはこの物語の主人公であるウエルテルの姿を真似し、そして彼の言葉を深く吟味し議論し合ったという。

そして現在でも、この作品のテーマは我々のような若い人間を苦しめ、奪い、与え、成長させる。

純粋な感情は尊重されるべきであるのか。社会の掟というものの重要性が分からぬ訳でない、…だが自分だけが知る自分の考えは決してその掟と完全に一致するとは限らない。いやむしろ、それらが全て分かっていからこそ悲劇なのである。掟が、またそれを根底にする自分の良心が、自分自身の純粋な感情と相反する。

どうして社会というものは冷静に、堅実に生きよというのか。情熱があるからこそ生は感じられ、時代は動くのではないか。死せる生よりも、生ける死を望むのは罪であろうか。誰しも、そう考えたことはあるだろう。

この作品の主人公であるウエルテルは友人ウエルヘルムへ宛てた手紙でその苦しい心の内を吐露する。彼は厭世のきらいがあり、故郷と官職から離れて今で言う高等遊民のような生活を送っていた。知見のある人に招かれては離れる生活の中で、彼はロツテという美しい女性と出会う。

ウエルテルはロツテに情熱的な愛を寄せ、一途に彼女を思い続ける。しかしロツテはアルベルトという堅実で人柄の良い男との婚約が決まっており、近く結ばれることになっていた。ウエルテルはロツテとアルベルト両者にとっての親友であり続け、その実、心の内で苦悩する。今すぐにも彼らから離れなければ、今に自分はロツテを力づくでも奪ってしまいたいそうだった。

ウエルテルはロツテの制止を振り切って、突然彼らの前から姿を消した。いかに情熱が尊いものか説いていた彼は、自身の狂おしいまでの情熱を抑え込んで、善良なアルベルトにロツテを任せただった。

ウエルテルは新たに選んだ地で役所の書記官の仕事をもらっていた。しかし、貴族社会や世間に対して絶望し、その傷心からやがて再びロツテのいる地へ戻ってくる。ロツテはアルベルトと幸せに暮らしており、彼らは共に愛し合っている。ウエルテルは消えることの無いロツテへの情熱と、アルベルトへの羨望、そして彼らとの関係に思い悩む。

一方ロツテも、ウエルテルからの愛に気付き、またそれを無下に打ち捨てることのできない自分に苦悩する。3人が友人のままに居られるように、ウエルテルに別の女性をと考えてみるものの、どうしてもどの女性も彼には合わないように思えてしまう。ロツテはウエルテルを友人以上に想っていたのかもしれない。無論、アルベルトをそれ以上に愛していたのだろうが。真相がどうあれ、確かにロツテはウエルテルの苦悩に触れたのだった。

またアルベルトもウエルテルの想いに気付いた。彼も、始めは一友人としての気使いもあり、葛藤で苦しむウエルテルの為にも、ロツ

テへ彼と会わないように言つて聞かせた。しかし、ロツテはウエルテルの苦悩を知り、どうしても彼を一人には出来なかつた。この夫婦にも、ウエルテルの情熱への考え方で、擦れ違いが生まれる。そんな或る日、町で殺人が起こる。その犯人はある女主人に思いを寄せていた善良な召使の男で、だが女主人はその男に言い寄られても頑として首を縦に振らなかつた。彼らはとても信頼し合つていた筈だつた。遂に男は女主人を無理やり自分のものにするが、当然といえば当然、それ以前にもともと女主人の弟に嫌われていた事もあり、屋敷を追い出されていた。だがここでなんと、新たに雇い入れられた召使が、女主人と結婚することになつたのだ。追い出された男は、ついにその召使を殺してしまつた。ウエルテルはこの男に会つており、その恋路も聞き及んでいた為に同情、共感し彼を弁護する。しかし、そんなウエルテルを批判したのは、アルベルトであつた。アルベルトは実直な人間であり、情熱に生きるウエルテルとは正反対の人間だつたのである。…後に、この犯人の男は容疑を否認し、ウエルテルはいよいよ厭世の気を濃くする。しかれど、この事件はウエルテルに暗い暗示を投げかけたのは事実であつた。

この後、物語は伏線を収束させながら、ウエルテルの自殺によって幕を閉じる。自殺に使つたピストルは、ロツテの手から彼に受け渡されたものだつた。作中に登場する、名も無き狂人が告げた『幸福であつたとき』というのが理性をもたなかつた時であるというのは、やはりこの小説のテーマの一側面である。そしてウエルテルの自殺。自殺と自由意思の問題は哲学における論題の一つであり、大きな意義のある内容であると思う。ここではウエルテルは愛を永遠に得んが為の死であつた。ウエルテルが自殺したのは先の召使の男のように自分を抑えきれなくなつたから、かとも思つたのだが、それは理由のごく一部でしかないようだ。

しかし、この小説は高尚な哲学の本ではない。俗っぽい情熱的な芸術作品であり、その是非については意見が分かれるようだ。しかし、私はこんな情熱に満ちた生き方が出来るのは羨ましいと感じる所がある。今の我々に、これほどの情熱があっただろうか。口を開けば「詰まらない」と呟き、空想の世界の他者の情熱を写すだけの、醒めた人間ではないだろうか。例えばどんな墮落した、太宰治のような人間であろうと、その身を省みない情熱はあつた筈だ。

のたれ死んでも小説家として生きて行く。そんな情熱が、私は羨ましい。

ノルウェイの森 作・村上春樹

恋愛小説、という括りが一つの固定観念として石のように頭の片隅を占めていた。

一回目、この村上春樹の傑作を読んだ時はこれは非常に優れた現代文学だと思った。現代人の抱える、こうモヤモヤした霞み、そして全てを知りつつもそこから逃れられない不条理な運命を、主人公ワタナベの回想からビートルズの「ノルウェイの森」をBGMに語られていく。

あなたの為の私、私の為のあなた。そんな相互関係は幻想だろうか。ヒロインの一人である直子は前者を求めながら後者に縛られ、またもう一人のヒロインの緑は後者であり前者でもあろうとした。私の推測ではこの二人のヒロインが得られた愛など結局無かつたのではないだろうかと思う。また、これが女のエゴであるならば男のエゴもまた悲劇的である。ファウストのような男、永沢。異邦人のまま退場し、遂に最後までその消息が分からない同級生の「突撃隊」。ワタナベの親友であり直子の恋人であった男、キヅキ。まるで始めから噛み合わない歯車を並べたような構図である。これは確かに、ビートルズの歌の歌詞と似たものを感じる。

さて二回目。もう一度この小説を読み返し、一体「恋愛小説」とは何か考えた。一途に想い続けた人と結ばれるまでのサクセスストーリーか、それとも恋人が不治の病でポツクリ逝ってしまう安価な悲恋か。私にはそんなイメージだった。しかし、である。これはあくまで「恋愛」であった。「愛」なんて完成されたものではない。不完全も不完全、矛盾を抱えてもがき苦しむことこそ恋愛であるのかも知れない。この小説の中で特に気に入った文が幾つもある。

例えば、直子の手紙にある「歪み」について。彼女はサナトリウムで暮す人々を自らの「歪み」に気付いた人間とし、普通の社会に暮

らす人々を自らの「歪み」に気付かない人間だとした。歪みを正当化できない人間が狂っているというのは何とも皮肉だ。

また、のちにワタナベが喪失の中に見出した真実も、真に迫るものがある。

「どのような真理も、どのような誠実さも、どのような強さも、どのような優しさも、その哀しみを癒すことはできないのだ。我々はその哀しみを哀しみ抜いて、そこから何かを学びとることしかできないし、そしてその学びとった何かも、次にやってくる予期せぬ哀しみに対しては何の役にも立たないのだ」

これは如何に言葉を尽くそうともこれ以上にないくらい悲しい気持ちをよく表している。胸を打つ文章というのはこういうのを言うのだらうと思う。

そして二週目になって気付いた一文。

「人が誰かを理解するのはしかるべき時期が来たからであって、その誰かが相手に理解してほしいと望んだからではない」

この永沢の台詞は小説冒頭、ワタナベが直子を失ってようやくと理解し始めたことに絡めているものでもある。

数々の名文に彩られ、男女の在り方への深い示唆を与えるこの小説。

「1Q84」は正直イマイチだったが、これはとても面白かった。

未だ私にもこの小説のすべてを解釈し尽くすことは出来ないだろうし、ここに書いたことも見当外れの解釈かもしれない。しかし、この小説は間違いなく一読の価値のあった小説だと思うし、再読の価値もある作品だと思う。

人をどう愛すればいいのか。

恋愛小説の中枢は、かくあるべきだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890y/>

読書記録

2011年12月16日22時51分発行